

馬獣医のよもやま話③⑧ 池田寛樹獣医師

ローソニア感染症について



静内診療所 池田 寛樹
平成22年3月酪農学園大学卒業
平成22年4月日高軽種馬農協入社
静内診療所勤務 現在に至る

10月に入り当歳の離乳も一段落したところでしょうか？今回は、離乳期当歳に多い病気であるローソニア感染症についてお話ししたいと思います。経験がある方も無い方も要注意な病気ですので、少しだけお付き合いください。

まずローソニア感染症とは、Lowsonia intracellularisという名前の細菌が原因で起こり、離乳前後の感染・発症がほとんどですが1歳でも散発します。この細菌は小腸の粘膜で増殖し、感染した小腸はどんどん肥厚していくことから、増殖性腸症とも呼ばれています。肥厚した小腸は栄養の吸収や水分の調節など本来の機能を失ってしまいますので、下痢や食欲低下、さらには体重減少といった症状を示します。腸の動きが弱くなり、疝痛症状を示すこともあります。また、小腸から多量の蛋白質を失ってしまうことで、血液中の蛋白濃度が著しく低下し、顔、四肢、腹部などがむくんできます。

糞便や血中抗体検査により確定診断を行いますが、多くの場合は臨床症状や低蛋白血症などの血液所見、さらには腹部エコー検査で肥厚した小腸を確認することで推定的に診断し、治療を開始します。

治療は細菌感染ですので、抗生剤の使用が中心となります。また、必要に応じて脱水や低蛋白血症に対する点滴や血漿輸血などによる対症

療法を行います。症状や血液所見などをみながら治療を行っていきませんが、治るまでに数週間かかってしまうことも少なくはありません。早期から治療を行えば、予後はそれほど悪い病気ではありませんが、治療する側も管理する側も根気よくやっていかなければなりません。



図1：下顎部のむくみ

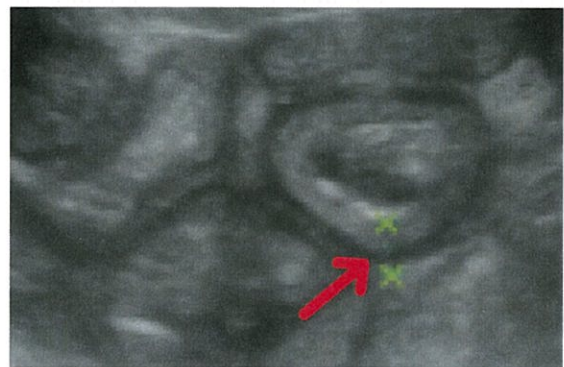


図2：腹部エコー検査での肥厚した小腸(横断像)

糞便を介して他の馬に伝播し、集団発生する可能性もある病気です。これからの時期の当歳で、元気や食欲がない、下痢気味、むくみがあるなどといった症状があれば、早めに獣医師に診てもらうことをお勧めします。

最後までお付き合い頂きありがとうございました。